

北米大学図書館訪問記（2） 保存図書館編

総合人間学部整理掛 富岡達治

1. はじめに

今回は、電子ジャーナルを中心に、トロント大学とピッツバーグ大学について報告しました。今回は、保存図書館を中心に、Northern Regional Library Facility（カリフォルニア大学）、Southern Regional Library Facility（同上）、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校について報告したいと思います。

2. 保存図書館について

図書館で取り扱う資料は、際限なく増えていきますが、入れ物としての図書館が持つスペースは、限られています。新たに資料を受け入れるためには、現在の資料を廃棄するか、新たなスペースを確保する必要があります。大学図書館の場合、重複や破損・汚損などを除き、廃棄することはほとんどありませんし、集密書架を導入し、高密度化を図ったとしても、既存施設では大きな効果は望めません。

そのため、新築・増築などによる新たなスペースの確保は、以前から図書館の切なる願いでした。また、運用コストの面からは、1つの図書館だけではなく、複数の図書館による共同利用施設も視野に入れる必要があります。そこで、今回は米国での事例をもとに、京都大学ではどうすべきかについて考えたいと思います。

3. カリフォルニア大学(University of California)

アメリカ西海岸のカリフォルニア州は、日本列島がそのままおさまる南北に長い形と大きさです。カリフォルニア大学も、南北に9つのキャンパスが点在しています。これらのキャンパスの共同保存図書館として、北部地区にNRLF (Northern Regional Library Facility)、南部地区にSRLF (Southern Regional Library Facility)

が設置され、利用の少ない資料や貴重資料を最適な環境で低コストに管理するために運営されています。これらの施設は1977年の『The University of California Libraries, A Plan for Development』での勧告に基づいて、設置されました。

SRLFについては、『静脩』Vol.37, No.3 (2000.12) にカリフォルニア大学ロサンゼルス校東亜図書館司書のマルラ俊江氏による紹介記事があります。

3.1. NRLF(Northern Regional Library Facility)

NRLFは、カリフォルニア大学北部のバークレイ校(UCB)、デイビス校(UCD)、サンフランシスコ校(UCSF)、サンタクルツ校(UCSC)の4つのキャンパスの資料を取り扱います。NRLFはUCBの北西約16kmのリッチモンドに位置し、UCBからはキャンパスバスが往復しています。1982年に完成した第1フェーズは、事務室、閲覧室と308万冊を収容できる書庫が、続く1990年に完成した第2フェーズは237万冊を収容できる書庫が設置されています。さらに、2001年から2002年には、第3フェーズが完成予定ということでした。敷地は、さらなる増築ができるよう十分に確保されており、最



NRLF

最終的に第6フェーズ、1,800万冊まで収容できるようになっています。

3.2. SRLF(Southern Regional Library Facility)

SRLFはカリフォルニア大学南部のアーバイン校(UCI)、ロサンゼルス校(UCLA)、リバーサイド校(UCR)、サンディエゴ校(UCSD)、サンタバーバラ校(UCSB)の5つのキャンパスの資料を取り扱います。NRLFと違い、UCLAの敷地内に位置します。1987年に完成した第1フェーズは、NRLFと同様に事務室、閲覧室、および350万冊を収容できる書庫が、1996年に完成した第2フェーズにも350万冊を収容できる書庫が設置されており、さらなる増築も可能になっています。

NRLF、SRLFともに、評議会の定める一定の運営金を支払うことによって、カリフォルニア大学以外の図書館であっても、参加することが可能となっています。

3.3. 設備

両施設ともほぼ同様の設備を備えています。書庫は、二重ドアで仕切られており、摂氏約15度、湿度約50%(マイクロフィルムスペースは約30%)に設定されています。さらに、紫外線をカットするフィルター付きの蛍光灯や、何重もの空気清浄装置が取り付けられ、資料保存に最適な環境を維持しています。



書庫(NRLF)



資料をサイズ別に分けるためのゲージ

資料は、サイズ別(高さ別)に5段階に分けられ、バーコードを貼付して、受入順にそれぞれ配架されます。書架は固定式でしたが、奥行きが約45cmと深く、それぞれの段に2列ずつ資料が配架されていたのには驚きました。このような高密度化の方法をとっても、資料は受入番号順に並んでいるため、探しにくくなることはないとのことでした。また、電動式の集密書架などと比較しても、資料にたどり着くまでのスピードが速く、なによりも低コストで建設できるという利点があるとのことでした。これは広大な敷地を保有しているからこそ可能な選択肢であり、スケールの違いを感じさせられました。

3.4. 受入

各施設に資料を搬入するにあたっては、各図書館はあらかじめ決められたガイドラインに沿った処理をしておかなければなりません。例えば、カリフォルニア大学の総合目録に登録されているか、相当する目録データを提供すること。特別な貸出条件が必要な場合にはその旨を明記すること。状態の悪い資料については、箱に入れるなどの適切な処置をしておくことなどがあげられます。また、できる限り多くの資料を効率的に管理するために、原則として重複する資料は、受け取ってもらえません。

搬入された資料は、サイズ別に分けられ、背表紙にバーコードを貼付した上で目録登録されます。搬入されてから配架までには3~5日を要し、SRLFでは1ヶ月あたり平均15,000冊を受け

入れているとのことでした。

いったん受け入れた資料は、各施設で保存し続けることが望ましいのですが、利用頻度が高くなった場合には、元の所蔵図書館に戻す（Deaccession）ことも可能です。運用開始当時は、その件数も多かったようですが、最近では後述のようにデリバリー体制が充実しているため、減ってきているとのことでした。

3.5. 利用

各施設には来館利用ができるように閲覧室があり、検索用端末やコピー機などが設置されています。しかし、書架をブラウジングしての利用には適さないため、来館利用は非常に少なく、複写・貸出依頼が主となります。

資料は、カリフォルニア大学全体の総合目録システムであるMELVYLや各キャンパスのOPACから検索することができます。複写・貸出依頼は、各キャンパスのOPACと連動し、様々なオプションを指定して、オンラインで依頼できるようになっています。資料は基本的には指定した図書館に配達され、その図書館の貸出規則に則って貸し出されます。依頼を受け付けてから配達までは、同一地区へは2日以内（実質1日）、他地区（北部 南部）へは4～5日以内（実質2～3日）としています。UCLAのOPACシステムであるORION2では、有料ながら実質半日程度で資料が入手できる「ORION Express」というサービスも提供されています。

4. カリフォルニア州立大学ノースリッジ校 （California State University, Northridge）



デルマー・T・オビアット図書館

CSUNは、22あるカリフォルニア州立大学の1つであり、ロサンゼルス市の北西約30kmに位置します。1994年のノースリッジ地震では、大学全体が大きな被害を受けました。訪問時には図書館は復旧していましたが、学内ではまだあちこち工事中で、被害の大きさを痛感しました。

4.1. ASRS

（Automated Storages & Retrieval System）

中央図書館であるデルマー・T・オビアット図書館（Delmar T. Oviatt Library）では、ASRSという自動書庫システムを1991年より導入しています。自動書庫システムは、我が国でも国際基督教大学や明治大学、京都府立図書館などで導入されるなど、徐々に広がり始めています。

自動書庫の基本的な仕組みは、資料をコンテナに収め、クレーンでコンテナごと取り出して出納するものです。ASRSでは、約60cm × 120cmのコンテナを33列 × 34段のラックに収め、それらを12列並べ、書庫スペースに設置しています。そして、6本の通路それぞれにクレーンが配置され、出納依頼に応じて該当のコンテナをピックアップステーションまで運ぶようになっています。

自動書庫の特徴は、資料がどのコンテナに入っているかをシステムが管理しているため、資料の配架場所を固定しなくてよいということです。これは、複数の資料をまとめて入庫（収納）することができ、返却図書を配架するために書架の間をブックトラックを押して動き回る必要がないなど、作業の効率化を図ることができます。また、接架の必要がなく、高層化できるため、高密度化できるということもあげられます。ASRSのラックの高さは12mにもなり、約120万冊の資料を収容することができます。

利用者は、OPACからASRS内の資料を依頼することができます。依頼があった場合、該当のコンテナがピックアップステーションに自動

的に運ばれてきます。オペレータは、画面を見ながらコンテナ内から該当の資料を探し、バーコードを読み取って出庫処理をします。利用者は貸出カウンターで資料を受け取りますが、要する時間は10分以内とされており、多くは5分程度とのことでした。入庫の場合は、空きのあるコンテナが自動的に運ばれてくるため、バーコードを読み取って入庫処理をし、コンテナ内に資料を返却します。

また、自動書庫では、資料の出納利用統計を容易に出すことができるため、年2回以上の利用があった資料は、開架への移動を検討するなどの資料管理にも利用されています。

5. おわりに

はじめにも述べましたが、増加しつづける資料と保存スペースの問題は、図書館にとって大きな課題です。京都大学でも、各図書館・図書室の狭隘化は深刻な問題となっており、早急な対応が迫られています。利用の少ない資料を複数の図書館で共同保存するという保存図書館は、その第一の解決策となります。京都大学では、その建設を平成13年度概算要求として提出しましたが、残念ながら実現には至りませんでした。引き続き要求されています。計画されている保存図書館は、自動書庫システムの導入が考えられており、以下の点で今回訪問した各図書館（NRLF、SRLF、CSUN）の事例を活用していけるのではないかと思います。

- ・施設はメインキャンパス外に建設予定であり、さらに他大学との共同保存図書館とするため、充実したデリバリー体制を整える必要があること。
- ・自動書庫を導入予定であるため、そのメリットを最大限に活かせるような資料管理体制を図ること。

上記2点の大前提として、資料を効率的に検索・依頼できるシステムの開発、および遡及入力の推進があるのは言うまでもありません。ま

た、学術資料の後世への継承という機能も忘れてはいけません。そこに収められるものは知の蓄積であり、図書館がおこなってきた活動の軌跡でもあります。今回、書庫に収められた膨大な資料を前に、あらためて感じました。

最後になりましたが、今回の研修では本当に多くの方々にお世話になりました。心より御礼申し上げます。

（とみおか たつじ）



ASRS